

1：団体概要

<工房発足の経緯>

- 工房の発足以前から、主なメンバーが「北海道紙芝居研究会」のメンバーとして北海道内各地での紙芝居上演活動や紙芝居文化についての研究等に取り組んでいた。活動の中で、「大人向けの紙芝居の会も開いてほしい」との要望があり、「大人も楽しむ紙芝居」という形での定例上演の取り組みを開始した。
- 「大人も楽しむ紙芝居」に取り組む中で、次のような現状について考えることとなった。
 - 1) 「紙芝居＝子供のもの」という受け止め方・先入観が、一般の人々はもちろん紙芝居活動者や児童文化研究者などにも幅広く見られる。しかし、紙芝居とは本当に「子供向け」の文化なのだろうか。あるいは、紙芝居活動に関わる者として、そこに留まっていて良いのだろうか。
 - 2) 紙芝居を子供に読み聞かせるにしても、大人側に「良い感性を受け止める土壌がない」という状況があるとしたら、子供たちに何を伝えられるのだろうか？
 - 3) 現在市販されている紙芝居の多くは「子供を対象」として制作・発行されている。その中には「子供向けに作られたものであるが、大人も鑑賞できる作品」はいくつか発行されるがその数は多くない。また、明確に「大人を主な対象とした作品」はほとんどみられない。このため、演じてみたい原作を見つけても、紙芝居化されていない状況がある。
- そうした現状についての意見交換の中から、紙芝居の持つ文化としてのポテンシャルや魅力を踏まえた時、紙芝居は「大人にも味わってもらえる文化」であり「大人こそ目をむけてみる文化でもあるのではないか」という考え方を出発点として、大人を主要な対象とした紙芝居制作や上演活動を基本方向とする工房を設立した。

<取り組みの主な方向性>

- 「既存の出版社の在庫にはない本や作品」「じっくり観賞でき、触れるたびに新たな発見があるような作品」「面白い、楽しい…という作品だけではなく、観賞し終わった後にも余韻を味わえるような作品」などを掘り起こし、自分たちの手で紙芝居として制作・発行していく。
- 紙芝居観賞をきっかけとして、観賞者が原作や原作者、原作者の他の作品へと文化的な興味・関心を広げていく方向への、橋渡しの役割を目指す。
- 地方からの視点、地元の創作者、活動者との連携を柱とした制作・情報発信を行っていく。
- 紙芝居を1つのきっかけとしながら、絵本、朗読、読書、演劇など、さまざまな分野の取り組みとつながり、すぐれた作品に身近に親しんでいく機会を、さまざまな方法で広げていけるような活動を目指す。

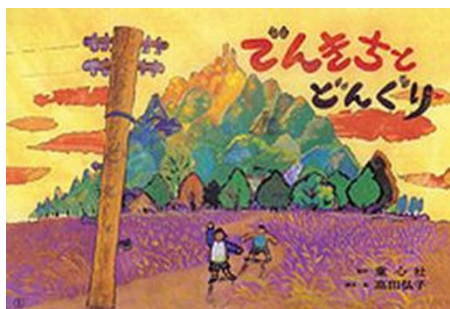
●団体概要

団体名称	不思議の庫無本工房（ふしぎの くらむぼん こうぼう）
所在地	〒005-0822 札幌市南区南沢2条2丁目13番21号
電 話	電話／FAX：011-572-6190
代表者	代表 福寿 裕美子（ふくじゅ ゆみこ）
主な活動内容	1) 創作活動＝紙芝居、絵本、文芸作品等のオリジナル作品の制作・出版 2) 学習活動＝紙芝居、朗読、表現活動などの上演会や講座・研修会の開催、講師の派遣活動 3) 連携活動＝幅広い文化活動団体との連携、コラボレーション・イベント等の企画・実施 4) その他 ＝表現活動・創作活動を中心に、さまざまな文化活動のネットワークを広げる取り組み全般
活動開始年	2008年3月
主な出版作品	紙芝居：工房制作作品8作品、受注制作作品1作品、制作作業中2作品
サイト	https://fushiginocrambon.com/
問い合わせメール	info@fushiginocrambon.com

●新美南吉シリーズ作品 作画担当・高田弘子氏プロフィール

- ◆北海道恵庭市出身。短期大学で保育を専攻後、児童養護施設や保育園等に勤務しながら、絵画制作、紙芝居制作に取り組み、あわせて地域の図書館にて、（おはなしのぼうけんエルマー）として読み聞かせ活動にも携わる。
- ◆2000年、神奈川県 第1回手づくり紙芝居コンクールにて、大賞、童心社賞を受賞。同コンクールにおいては、以後も『でんでこ山で笛ふけば』『るんぱっぱ』『ちゃぶしろろ』などの作品などで受賞を重ねる。
- ◆主な紙芝居作品として、原作と作画を担当した『でんきちとどんぐり』、『つきよのおふろ』（いずれも童心社）、『こちょこちょたろべい』（不思議の庫無本工房）、作画を担当した『子どものすきな神さま』、『狐』（いずれも不思議の庫無本工房）などがある。

（童心社発行の2作品）



2：発行作品リスト

●高田弘子 新美南吉の世界

1：子どものすきな 神さま

<13場面>

原作：新美 南吉

画：高田 弘子

脚色：伊葉 冬歩

2018年 初版

2019年 改訂増補版



ふだんは森にいて、歌をうたったり動物と遊んでいる神さま。実は子どもが大好きで、ときどき村に出てきては、子どもたちと一緒に遊びまわります。けれども誰の目にも見えません。ある雪の日。子どもたちが、雪面に押しつけて写した顔の跡を数えていると、なぜか一つ多いのです。神さまが遊びに来ていると気付いた子どもたちは、何とか捕まえようと相談しました。

2,255円＋税

税込2,480円

(在庫あり)



2：狐

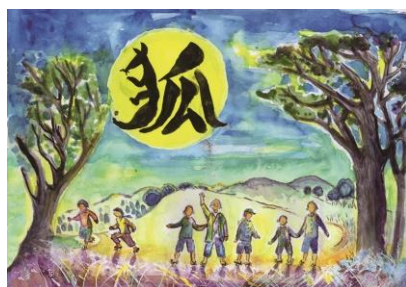
<21場面>

原作：新美 南吉

画：高田 弘子

脚色：日暮 道登志

2022年発行



7人の子供が夜のお祭りに出かけました。年下の文六ちゃんの下駄を買うため途中で下駄屋に寄りました。店でお婆さんから「晩に新しい下駄をおろすと狐がつく」と言われ、子供たちは不安を覚えます。お祭りを楽しんだ帰り道。突然、文六ちゃんが「コン」と咳をしました。「もしや狐につかれた？」と子供たちは怖くなり、文六ちゃんを家まで送らずに別れました。家では、文六ちゃんがお母さんに「夜、新しい下駄をおろすと狐につかれる？」と尋ねます。するとお母さんは……。少年の感じる「孤独」と母親が子供に寄せる思いを柱とした新美南吉最晩年の名作です。

3,500円＋税

税込3,850円

(在庫少)



3：うた時計

<※制作中>

原作：新美 南吉

画：高田 弘子

脚色：日暮 道登志

2023年発行予定



早春のある日、少年・廉は、三十過ぎの男性に声をかけられ、野中のさびしい道連れ立って歩いていました。廉が戯れに男性のポケットに手をいれると「うた時計」の美しい音色が響いてきました。それを聴きながら廉は、妹の思い出や薬屋のおじさんとうた時計の由来を男性に話して聞かせました。分かれ道で男性は「清廉潔白な大人になれ」と告げ、廉にうた時計を預けて去っていきました。そこに薬屋のおじさんが追いかけてきて……。新美南吉ならではの物語性あふれる作品の1つです。

(※制作中)



● 紙芝居上演の状況写真



● 2018年 新美南吉記念館での上演



● 定例開催・大人も楽しむ紙芝居（札幌市）



● 『狐』 作画者・高田氏の上演



● 高田氏の「お絵かき紙芝居トーク」



● 総合的学習についての教師研修会での上演



● 岩手県花巻市での出張上演会